



「利用者さんの持っている力を信じる」

それまで自立して生活していた A さんは、突然闘病生活を余儀なくされ不安が強く、一人では何もできないとふさぎ込んでいました。しかし実際は、大手術を乗り越え、一人暮らしの自宅へ戻った、強く努力家な方でした。私たち訪問看護師は、A さんができていること、頑張っていることに目を向け、それをご本人に伝え続けました。また、A さんが手の震えのために諦めていた、趣味の絵手紙を再開できるように OT へ介入を依頼しました。絵手紙を再開した A さんは、みるみる自信を取り戻し、本来の明るく素敵な笑顔を私たちにを見せてくれました。

病や障害で阻害されている、その方が本来持っている力を対話から引き出し、その力を発揮するための、初めの一步を支える関わりを私たちは心掛けています。



主人とは16歳のときからの知り合いなんです。お互いの父親も顔見知りです。主人の妹は私と同じ歳です。主人は離婚して1人になっていました。私は一生結婚しないだろうな、と思ってましたが、5年前に結婚しました。両親がとても喜んでくれました。私は不思議な感じですが。病院って何度も名前を使うじゃないですか、ようやく慣れたところです。

体がしんどくなってしまうとどこかに連絡するのも億劫になってしまっ
水曜日の訪問看護もすっかり忘れていて、慌てて玄関に行ったら呼吸がハカハカして。訪問看護さんもビックリしていました。週明けまで待たないで病院に行った方がいいって。

貧血だと輸血が必要だから聖路加になるのかな、って思ってたけど、脱水だったみたいで。訪問診療の先生に採血とか点滴とかお願いした方がいいかもしれませんね。
処置も2時間くらいかかるので主人に負担かけているなって。これまでストマが3つになっても1人でできていたのでよかったんですけど、今は下の方が見えないうえ、処置中に漏れると処置がものすごくかかるので、訪問看護さんをお願いする必要があるかな、と思っています。

自宅で夕食の一品でも作れるようにしたいな、と思っています。

「本人の希望をチームで支える」

私は退院調整看護師です。面談記録を写真に撮りました。

ご本人との面談で、その人が“何のために治療に向き合っているのか”、ご本人が自らの言葉で表現できるように、体調や訪室時間を見計らって面談時間を調整したり、病棟 Ns や医師、家族から情報収集をして会話の糸口を探したりしています。

この方は腹部に皮膚腫瘍を抱えながらも、夫の協力のもと日々の処置を行い、自立した生活を 送ってこられました。しかし腫瘍はどんどん大きくなり、いよいよ訪問看護の支援が必要な状況となりました。

在宅調整のために面談した際の患者さんの言葉です。私はこの希望を、ご本人に関わる院内や地域の医療・介護関係者と共有し、お互いに知恵を出し合って希望を支える療養方法を見つけ出すことが役割だと考えています。